

繪本月宵鄙物語  
五

3154  
5



特  
3154  
5

所んけしか  
市川兼次郎  
三一丁目

打振の如くしやわらう袖袂小焼付たり此路おほを打こめて  
 一たのまき火より。貴子天井。後ア七煙の炎おしきほひく貴子  
 れ答をもたまりぬを遊ゆんとせし煙の中お羊の如きおりのて角を  
 へく仰るあやがの中おまろび落く。あやか焼ぬ夕霜のかえり有  
 なるが家らら火なる火なるより周章はらして履物もえりぬ  
 る糸履を捨てしめて大跡へ走り去るまされ近隣の若くも此  
 辛じて打消つ叔善を火に送てそれはお猿く焼くれり尻長  
 の居る友達ともて付てきり持よりて免角らりけり今一  
 されど目鼻ひとつお取きては耳の根までつりつりさるる  
 赤鬼の如く月うら班らふふられあがりて帳幕のまに  
 探ぐれば父好しの箱のまらう半跡はしくて今の迹もまらう

紅印

那加吾卷

十九

支離ちり成なり後のち執と念ねん物もの路じとして付つままとんハを常じょうもは宮みやの内の  
 物もの半はんハ焼けらしるひはるら人ひとハ朽れりのこ居いれば終つひに終つつては胎たい識し小せう及および大  
 この人ひとは窮すれば悪んど起おこす物の代はして癡ち者者のの言をなれば又またふるの  
 人ひとハ出でて夕ゆふ霜しもをかかりしひ云いふも。昨日きのう友とも達たちの語をかきつては埴は科かの老法師ほふし  
 檀だん越えつの仏傳でんをかきて五ご十じゅう支し斗とうの布施せをおしらしるといふこは倭やまとにか往ゆつ  
 然しかんと我われもかかりしてうれを愕おどろかすも其その令しやうにまりてとやめし女にの長  
 老らうをかきししるのゆ故ゆ今いまお悔し居れば法はふ味みをたがりんん住ぢすんといふも  
 かつり次振ふる随すいのひはらすんど思おもはれ目めはかきて鬼おにの妻をあの鬼神かみがると  
 いふもを和なおしめば如ごとく弱くて物ものの身にまりて只ただ我われがいんまにせよと  
 引ひきかりして埴科かといふもと出行いつり夕ゆふ霜しもハ實にあらはれるあらといふもとて逃にげる  
 然しかんと吾われが前にあらはれるが彼寺てらの門を近づくらりて何なんのゆえにあらはれん

口くち論ろんをちぢぢめて妬ねたまいりて聲こゑを夫の際らうひて密ひそ法ほふ師し通とうす  
 女にめいりとべとうとそのいふ刀かた拔ひけり切きりて追おひ追ひまれば女に  
 汗あせ水みづをありて坂さかを登りお下りして門かどにありて既すでに國を越え入りとうす  
 追おひ追ひまれば耳みみをかきして度々た々た夕ゆふ霜しもハ引付ひけるが復しる草くさ履りを  
 まうとひ脱ぬぎし門かどの内へ投入なげし佛ほとけ達たち我われを救ひ給ふと叫こゑがを音ねに世  
 といふも伏ふせて氷こおりの妙の刀女にの胸にあらはれしと押あつて寺傍たもとを逃れして  
 のの女に人ひと救すへとりしと門外かどに走出はりて取とり障を障ふ女の書院いんをはりて逃にげり  
 後のちに佛の老僧らうそうの後かがありつて助すけけ給ふと居いり居り居り居り居り居り居り居り居り居り居り居り居り  
 て今の女疾いそ返かへりして終つつて房達だちの身の上らしと怒りて女にを傍  
 ともはらじらす振ふる否いな一いっ夜や門かど内うちへ草履りを投入なげして助けよと頼むもあら  
 女に人ひと加く衣い沙さ衣いを可知してもうと知しるもあらずの振ふるればいうあらはれといふも  
 女に人ひと加く衣い沙さ衣いを可知してもうと知しるもあらずの振ふるればいうあらはれといふも

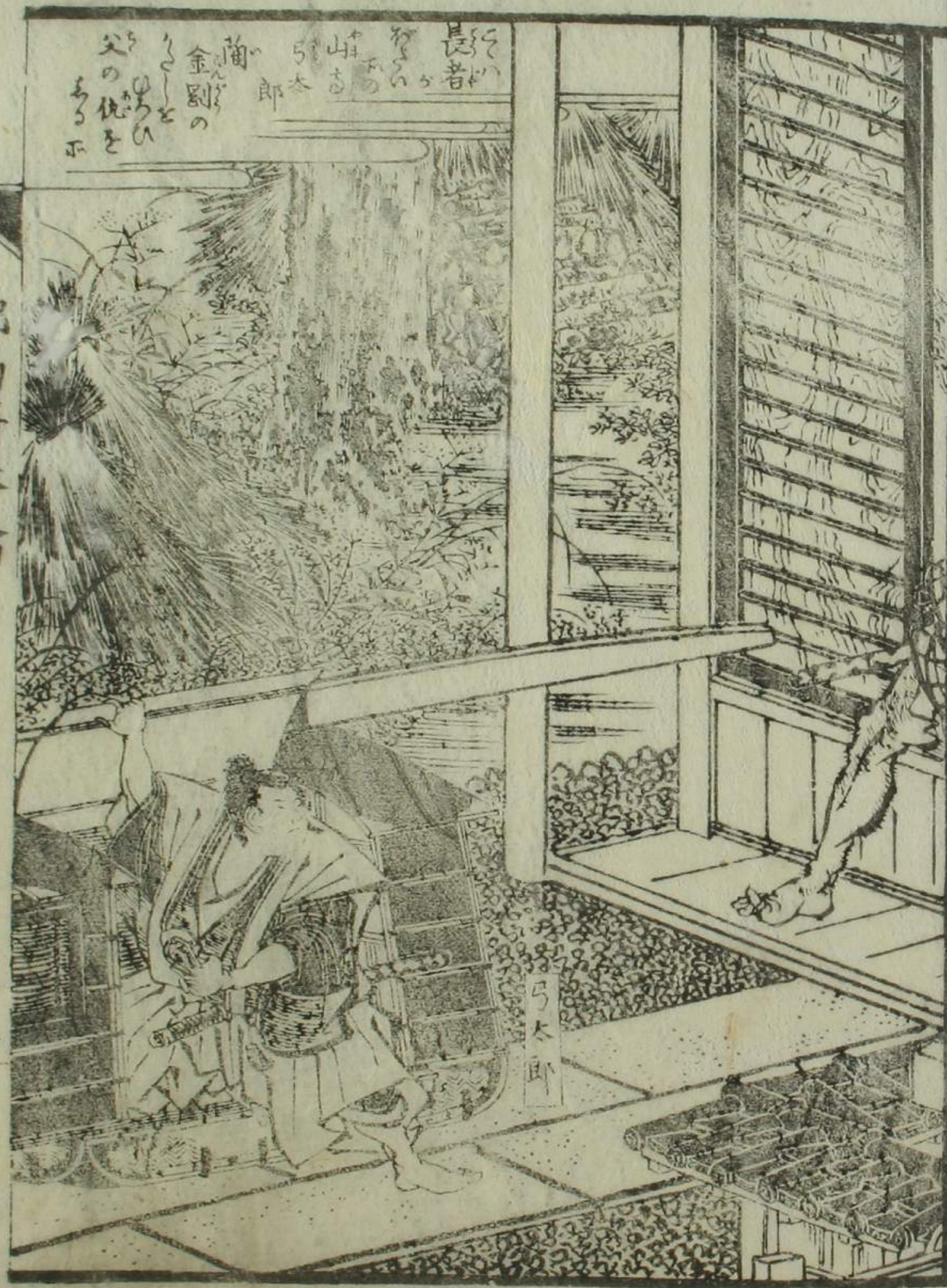
日本書紀卷之四

さじとかくあそいよく腹をまきつた跡ちりちりやぐて書院お躍りの  
 伎傍を向うは罵り云う。いふ法師のくくらふ他妻が隠して自己の  
 慰物おするやある。此に密法師の我妻お通めとみる者のありしを。  
 甲しうお老傍のさるるに相争も人よありと我を寂寞の昏太とまご知  
 らぬうとさるるに早うおかりくと察する。老傍のつとまのありのりま  
 てははぐお悪くさるる若傍もさるるにて精進お戒の聖を罵辱て身世  
 焔に驚鬼とするるるを知らる。非修非学の男ややく去て口業を護  
 せよと叱り人の程をまへさるる牛お説法と申ん嗚呼やとてせへれ  
 ば。さるるお法師のいさかひよとなふとかりれ女お昏太のいひをへる傍は一向  
 老傍の衣お紐りつきて。さるるの者おは恨まれるが我は一条殺されぬじ。  
 われは慈悲我命を買取らるるも此難を救りせ終へとはつとを離

是れお傍らりてあぐて。明らうにかうさるるお老傍が寺門を強  
 ぶれも音使るるに必竟此間の信施を目ぐりてのりり言るるべられは  
 拒て追ゆるる夜陰に押入強盗りやせん所冷法師とて。彼室野を  
 はしなれるるとおひ切て。やぐて施物の入るる手箱より奇とせよ。  
 ひく今けり。如くなれぬの女のわやまらるる愚傍が今我以あがりん  
 ば。いしてさるるお屋敷れよじと佐つ。既し施物の令次派まんとする  
 門内お昇居て在るるお物の加るの内より。其令をさるるるの誓し付終へ夫  
 へさるるのわに尋ねて。さるるのとせうけてまわる老の伏面のらを即し  
 さるる比怪お搔破される額の疵次第お膿爛して。苦したれは月比の  
 人おも達るるおおをり。今日お父長老の百り日はありはれは愛の語で  
 今日お日まて敵に殺れらるる。新墳のあは返り愁歎して。さるるま返

らんとせし切らる。其の強かりたるの暫し控居るがらの内へ履の  
 投入くみ移りてさうお自ら手づから拵へて父お履せたる前の  
 足あて又足足の寂莫打の紐を緒すけける。板金剛よりたれ  
 悪者なりんと心ひ定じより人目も恥ぞうにち出たる。此  
 推柴漆の衣も同じく上下着て在るが。肩衣じろはあ投りけ  
 へる取てかげりの草履を推へけ。をゆるるるも善き傍す  
 者なり。尋ねるとゆめりといひふさより此蘭金剛の土所  
 我作りたる草履めてん移へくもゆめ父の履たつた。いほ  
 妻の履物とるなりそ有るも其ははんとはて同夕霜の弓を  
 顔を打てて老僧の衣の下より顔に打て申す。教かありし  
 額髪下くぬけ爛と眉毛あけて教の紫の練まね水つみを包くる  
 腫さるる。癩人の如く成るればは接腫はあれて日比の悪  
 穢きあき入へて顔ひき入して此金剛をんを物く公つと  
 ちや長老の履遠へてゆりつる次それとちも付て捨すて此間の火の  
 ちあれて出るとしてちやあまうに捨さらひて持出もちだ又外とへ  
 ちあれば有るまうせり。足返ひも履居る次それとんはち  
 ちあれば人殺の者探りまうんてのゆめやあんとちや胸裏  
 ちあればしちやあまうに捨さらひて持出もちだ又外とへ  
 ね同てあまうそあんの道にちあらちちいて有れば誰が捨  
 ちあまうてちあ取て履よりつるなるべし。いふ物とちやあ  
 伏屋の家風

をゆるるる。顔を打てて老僧の衣の下より顔に打て申す。教かありし  
 額髪下くぬけ爛と眉毛あけて教の紫の練まね水つみを包くる  
 腫さるる。癩人の如く成るればは接腫はあれて日比の悪  
 穢きあき入へて顔ひき入して此金剛をんを物く公つと  
 ちや長老の履遠へてゆりつる次それとちも付て捨すて此間の火の  
 ちあれて出るとしてちやあまうに捨さらひて持出もちだ又外とへ  
 ちあれば有るまうせり。足返ひも履居る次それとんはち  
 ちあれば人殺の者探りまうんてのゆめやあんとちや胸裏  
 ちあればしちやあまうに捨さらひて持出もちだ又外とへ  
 ね同てあまうそあんの道にちあらちちいて有れば誰が捨  
 ちあまうてちあ取て履よりつるなるべし。いふ物とちやあ  
 伏屋の家風



邪勿吾妻



番外 善左衛門

九二

ごと切草履のかじり斗衣ついで。さうして借手かりてよするん。けしうね少年せうねんの公こう  
 ごとかると空そらをそめて取合とりあと。その時ときに即懐すなはちの中なかより血ちは流ながる女をんな  
 系履けいりのかじりを吐はき出して足あしはさいつり比寂莫村ひじやくばくむらを我父われちちの宮城みやぎの跡あとをいぬり  
 て後の鍵投かぎなれどもと取際とりぎ。身を放はなして時前ときまへに待まちたが今いまの女をんなが投入いれこ  
 するに足の履くつも替かわれば寸分すんぶんも遠とほざ寂莫打ひじやくうちの花春泉はなはるいづみ緒いとえ外ほかは履くひ  
 有あるべくもそへど足あしをも程ほどちぢた靴くつも空そらうそ吹ふて歩ありもさる。あつはは  
 大人おとなのあつも今日けふの如ごとくまがりことなす。うり父ちちを欺あざむくて汝なつかが家いへも清きよひ  
 其その足あし踏ふむ行い伏ふく書かきまかせお疑うたがひは然しかくべいつて汝なつかが妻つまの履くつひ  
 正ただしれ父ちちの踏ふ遠とほへ後あとへこのめいん斯揭馬すけつばを建たたぬる人ひとの速すみは集あひ  
 せよと声こゑを扇あふして詰つまきうり夕霜ゆふしも足あしをさうり頭かぶも激湯げきとうをかゝるうりま  
 ごと。為なり方かたなく思おもはれぬ。おんとしてまう出いで膝ひざふるひ脚あしをてつこ

例たとうて弓ゆみを即すなはち手てのぐ起おこしまを引ひくと人ひと汝女なつかめ命いのちをくへ本もとを白しろ伏ふせ  
 と印しるしは付つく。さへもせと飛とべられ皆みな太おう弓ゆみの腕うでをまくと捕とへやれ男おとこえ  
 此この奴やつ逃にはると思おもはせむ。この者ものも握にぎ杖づゑ取とりてはりりつてつれてまの内の  
 男おとこどもも。さい梅うめ杖づゑらち振ふけ。ちちの打うち殺ころせとひもけい。右みぎ傍そばより一ひとは  
 うりして結むすぶ繩なはをぞらひひたれ。皆みなこの体ていをえん。さうれ腕うでをう放はな  
 さんとするふ程ほどにしろひと放はなれ。有あり合あひ相あいを押し合あひ合あひ。弓ゆみを即すなはちか  
 續つきまよ打うちた。花はな抄せうの令しやう浪なみこられ落おち。風かぜも乱みだり。山やま吹ふの露つゆも一度いちどや散ち  
 がぬ。うを即すなはちか。こそ矢や猛まよをぬれ病やまちうけか。うつれう人ひとも病やまを痛いたむ。打うち  
 て堪たへ難がたく。や有あり。うり。さうして手てもまらふ。嚙かむ。強あひ。振ふ放はなして踏ふむ。飛とべ。小こ指さ一ひと  
 ツを嚙かむ。切きる。眩くら暈うんく。うり。伏ふく。や。ぬ。を。解とく。台たいま。の。太お力ちからに。うり。て。様さまより  
 飛とべり。お。う。お。わ。の。て。て。う。の。勢いきひ。大おほ勢いきの者ものより。皆みなこそか。う。ひ。え。

遊目次つらひて踏むをけの門好はしそ走坂とむりに遊去り法師の  
 小鬼の迹する跡めての追難の豆こそ拾ふとあはる旋地をびひふかひて  
 夕霜をさへ入ん失ひたればおもにまらじらぬ掻く鉢巻しるも試もい  
 ちまうりなげぬ嗚呼がほくぞんえよたれ其間より去郎の老傍の介抱  
 てあふふ存既ふあふか遠去よりかきて齒がををさしと司の籠に訪て  
 退補を執りんと搦へられど悪瘡の疵は破れくいつちも術すく痛まるとは  
 終ふあ物搔ふられて空放伏臥へゆるる公のうららの念ともはし  
 かされて哀あり」斯く家よりゆりても益く苦痛小庭を目みえ結く死入と  
 度くなりたれど大刀自の薬店に在て矢六も糸並せ自ら恨ひきて  
 ぬ間ハ警公の君とて動さざじとつづるをり小仙のね氣の如く泣まは  
 ひく大刀自が詞をもれど医師のり人走らせて途へとれハ醫師を物

も取めを尋りての程をこるより大とふあるて大刀自のあふく  
 弓を即ぬしの病のけとより難治の症の上は破傷風をえ添られハ冥心は死  
 と刀之く仙家の不老不死のいごあはる人回す此人の命救ふとさあめあ  
 いたし我家の一本の奇方あり癩疾癒えんかかつ子も命斗の活ら  
 べし然れども高價の薬判るれば大刀自の体容なきて強く用ひじい  
 試みはひるんやといふ大刀自もめはのえ苦愛病のなあるべとひる  
 ハ彼奴が為る肉をそぐとどひて二三の金の費しもある病もいそは  
 後命斗を取らけて永く我家の恥をえんゆの中く物換ひし人交りも成  
 ど殺さうるふ存命てあえん今死か死ねじ既ハ病方の許が失て  
 終百日のあふ星もこれ救ふの命をのぼしれ公も障られハ医師  
 ハ貧窮神の使者とてとどへ我ハ医師あつひハ好も付ふびと候とらへ

了り手たし



醫師の腹をまきとてやわくと海に居たり。小仙のひのやうどいふまゝに  
 ておぼろふまをわらうが不老不死の薬を今救ひつばと云をまて哀  
 みるまもつと顔にして日比大刀自の壺をのらちお搔かすて人あもえ  
 せも打せらるる物を不老不死の薬なりと傍客ももつ云つるふも不斗也  
 ひよりてい此際盗まてらるる即君もまらせがやと手拭は教返中を  
 ら壺をの今言ひ明て身を細めて忍び入るの壺を探し取て取ま出る  
 が公せられて引きたるは合戸の音高く鳴られ蟻の叫くもやういふね  
 大刀自が地を耳に付て怪しとて爰を走りまると遠まらる。小仙は猫を  
 睨まれも扇の如く身もまて茶の壺を袖に隠し隠し隠し隠し隠し  
 を危くして盗人の壺をよ入る金盗ひあり。男も出あやと叫ぶが  
 飛りて壺を手に拭ひお取て仰せ倒れらる。小仙とるよりいふまゝに

おはして美子をかくめて目鼻も極つと續ららる。ハサホの壺も取返す  
 を合せ声を上げておぼろふと泣いて此女はさて家内の者もハまらる。こ  
 ろを伺てこえあう。傍杖を思れて取遣人もせまき夕は医師又きて  
 昔しゆも懲りぞ分入け。小仙を引退さぬ小仙は出るまをる。國産の  
 牛酥ありそれハ密小あやうけ伏玉の先祖ハ牛酥をとりて貢物とせし山  
 姥なりとゆし。扱其法を傳へ知りて此刀自いさる。酥酪をつり孫予ハ  
 もくれぞ己独服しければこそ那健めて有る。ゆを仙丹と云ひは病  
 者の為小盗つとんと思へはして不使おまへて漸し開放して一かき  
 大刀自又醫師お取う。盗人女の肩持てる山盗人。今日も業の帳  
 けてこれハ汝のまのせお物を賒る。手まらる。故出まこそ傍痛れり。刺  
 て債つくのいせんと云はる。服を刺るとそれハ医師仰天して振拂ひあ

をもつてして述出<sup>みづか</sup>か馬<sup>うま</sup>ふふ人<sup>ひと</sup>にして公付腰<sup>こうつけこし</sup>の廻<sup>まわ</sup>りかいさがるおとちう眼<sup>まなこ</sup>ほど  
 茶<sup>ちや</sup>店<sup>てん</sup>の忘<sup>わす</sup>れ置<sup>おき</sup>たる是<sup>こゝ</sup>此<sup>こゝ</sup>やど番<sup>ばん</sup>掛<sup>か</sup>の古<sup>ふる</sup>物<sup>もの</sup>をより買<sup>かひ</sup>とりて掛<sup>か</sup>よふけしるこ  
 首<sup>くび</sup>をりたれば<sup>ば</sup>債<sup>あひめ</sup>の形<sup>かたち</sup>押<sup>おし</sup>とられぬとさるとはして。さうとまゝりて店<sup>みせ</sup>の  
 門<sup>かど</sup>をさし伺<sup>きこ</sup>げば既<sup>すで</sup>に黒<sup>くろ</sup>刀<sup>やいば</sup>自<sup>みづか</sup>店<sup>てん</sup>のうらに冷<sup>ひや</sup>りたてて程<sup>ほど</sup>罵<sup>ののし</sup>り居<sup>ゐ</sup>るふ丁<sup>ちやう</sup>度<sup>ど</sup>目<sup>め</sup>  
 を入<sup>いれ</sup>合<sup>あ</sup>へ南<sup>なん</sup>堂<sup>だう</sup>と申<sup>まを</sup>師<sup>し</sup>助<sup>すけ</sup>と申<sup>まを</sup>へといひはる腹<sup>はら</sup>をじらより引<sup>ひ</sup>く。田<sup>でん</sup>畑<sup>はたけ</sup>も嫌<sup>きら</sup>むを  
 逃<sup>にが</sup>げに<sup>に</sup>伏<sup>ふ</sup>せの男<sup>おとこ</sup>漸<sup>しだ</sup>く小<sup>こ</sup>進<sup>しん</sup>付<sup>つ</sup>てくもこそこれるほどはあつた跡<sup>あと</sup>跡<sup>あと</sup>はさういへ  
 やとまれ此<sup>こゝ</sup>男<sup>おとこ</sup>めれ作<sup>つく</sup>の難<sup>なん</sup>病<sup>びやう</sup>も合<sup>あ</sup>へく凡<sup>おほ</sup>ね<sup>ね</sup>醫<sup>い</sup>師<sup>し</sup>の有<sup>あ</sup>るべとて例<sup>れい</sup>の利<sup>り</sup>に  
 いひりちり扱<sup>あつか</sup>すこ台<sup>たい</sup>太<sup>たい</sup>此<sup>こゝ</sup>日<sup>ひ</sup>誣<sup>しゆ</sup>科<sup>か</sup>寺<sup>てら</sup>や十<sup>じゆ</sup>分<sup>ぶん</sup>小<sup>こ</sup>は海<sup>うみ</sup>たるかたり成<sup>なり</sup>て  
 小<sup>こ</sup>妨<sup>まが</sup>られ割<sup>わ</sup>れ入<sup>い</sup>殺<sup>ころ</sup>しの迹<sup>あと</sup>跡<sup>あと</sup>を足<sup>あし</sup>付<sup>つ</sup>てくれはかをかへ憤<sup>いらい</sup>りかの童<sup>どう</sup>奴<sup>にや</sup>今<sup>いま</sup>宵<sup>よ</sup>  
 子<sup>こ</sup>さそ失<sup>うし</sup>りぬ此<sup>こゝ</sup>事<sup>こと</sup>極<sup>ごく</sup>めて露<sup>ろ</sup>敷<sup>しき</sup>なふんと打<sup>うち</sup>あけくる古<sup>ふる</sup>竹<sup>たけ</sup>打<sup>うち</sup>もに立<sup>た</sup>え  
 をかゝりて伏<sup>ふ</sup>せぬがらとをも伺<sup>きこ</sup>ひる山里<sup>やまのあた</sup>のさへひそきまは長<sup>なが</sup>月<sup>つき</sup>の初<sup>はつ</sup>より粟<sup>あは</sup>

ぼくは打<sup>うち</sup>付<sup>つけ</sup>兩<sup>りやう</sup>本<sup>ほん</sup>城<sup>じやう</sup>が赤<sup>あか</sup>の風<sup>かぜ</sup>の音<sup>ね</sup>骨<sup>ほね</sup>も凍<sup>こ</sup>りて寒<sup>さむ</sup>うりたれば使<sup>つか</sup>者<sup>もの</sup>は皆<sup>みな</sup>去<sup>さ</sup>  
 穴<sup>あな</sup>をどしめして在<sup>あ</sup>限<sup>かぎ</sup>りの男<sup>おとこ</sup>女<sup>め</sup>女<sup>め</sup>守<sup>まも</sup>りて皆<sup>みな</sup>寐<sup>ね</sup>寐<sup>ね</sup>するに大<sup>おほ</sup>刀<sup>やいば</sup>自<sup>みづか</sup>一人<sup>ひとり</sup>  
 火<sup>ひ</sup>もあらざる程<sup>ほど</sup>帷<sup>ゐ</sup>帳<sup>ぢやう</sup>引<sup>ひ</sup>合<sup>あ</sup>せし煙<sup>えん</sup>の下の在<sup>あ</sup>りるがまゝにたてて兩<sup>りやう</sup>風<sup>かぜ</sup>  
 く板<sup>い</sup>戸<sup>こ</sup>の隙<sup>ひま</sup>を吹<sup>ふ</sup>入<sup>い</sup>り燈<sup>とう</sup>灯<sup>とう</sup>消<sup>け</sup>ぬべく打<sup>うち</sup>まゝと合<sup>あ</sup>せし表<sup>おもて</sup>の方<sup>かた</sup>は抄<sup>しやう</sup>の伺<sup>きこ</sup>  
 氣<sup>き</sup>ひいて大<sup>おほ</sup>の夜<sup>よ</sup>寝<sup>ね</sup>らうと抄<sup>しやう</sup>の女<sup>め</sup>女<sup>め</sup>守<sup>まも</sup>りて其<sup>その</sup>方<sup>かた</sup>を足<sup>あし</sup>中<sup>なかつ</sup>る國<sup>くに</sup>  
 の下<sup>した</sup>なる土<sup>つち</sup>をわらうとまじて人の手<sup>て</sup>れ中<sup>なかつ</sup>なる物<sup>もの</sup>のほし出<sup>で</sup>る。此<sup>こゝ</sup>方<sup>かた</sup>は招<sup>まね</sup>き  
 むを尋<sup>たず</sup>常<sup>じやう</sup>の人<sup>ひと</sup>が魂<sup>たま</sup>消<sup>け</sup>てたもまづと大<sup>おほ</sup>刀<sup>やいば</sup>自<sup>みづか</sup>忍<sup>しの</sup>ぶ事<sup>こと</sup>もなす煙<sup>えん</sup>火<sup>か</sup>  
 を掻<sup>か</sup>きつ眼<sup>まなこ</sup>をさけて熱<sup>あつ</sup>くたれば平<sup>ひら</sup>ら戸<sup>こ</sup>尻<sup>しり</sup>の栓<sup>せん</sup>を大<sup>おほ</sup>刀<sup>やいば</sup>握<sup>にぎ</sup>りてねんくと  
 そるなりなり大<sup>おほ</sup>刀<sup>やいば</sup>自<sup>みづか</sup>わくことさうゆと考<sup>かんが</sup>へてはるあはれ盗<sup>ぬす</sup>人の事<sup>こと</sup>の  
 長<sup>なが</sup>さうね。いそいで後<sup>のち</sup>の懲<sup>ちやう</sup>めあせん。やとまらぬ足<sup>あし</sup>のさかめたあ  
 る抄<sup>しやう</sup>の首<sup>くび</sup>とてさうりたればよた也<sup>や</sup>も有<sup>あ</sup>りたれと取<sup>と</sup>りて抜<sup>ぬ</sup>けぬ。はし足<sup>あし</sup>て

戸口より件の腕をひきこきつらふゆゑまに柄も通直とつらぬとて堅き  
 変まつゆり込くちまぐり盗人のつと叫びられも男の例の小仙ぐさ  
 ありやう？とこころほひく。金引ろだてちり釘をこて誰一人声合せれ  
 者もなし。大刀自れりてひらてかがる。雨風落がりと夜わかく打解とも  
 存るりの盗人の表あり。記念せし捕へよと叫ぶれも。実盗人あり  
 と驚きと聲ど松明よ棒よと叫ぶれも。隙小彼盗人の逃とかくやありひ  
 けん。我と枕打切とめと火暗しして失われ。これをえり者吉次を頼み  
 振。盗人の肝魂はまふ人あり。是ありと。怖れとまぐりに追々んもせ  
 ざりけり。板火照して其腕をえり。焼爛とる痕ありて小指一あり  
 てもれば。門守大也や敷とるんといひ。ちろふや。うきはけて。ありひ合  
 てるふ。あれは苦痛を忍びて立出つる。果して苦を統とわすれん

ありと。有しゆぎも。大刀自れ。祖母のし。入替めて。かくちね。終る。我の今。彼奴が。為す殺される。は。我今。祖母の。場なり。と。恨びり。ば。大刀自れ。長老の。雙敵と。交て。討滅。され。念か。多れ。痛手。負せ。つる。と。責て。の。腹。かせ。あり。い。を。其。敵。の。奴。が。肉。を。脛。に。て。喰。が。や。と。祈。ぐ。ひ。け。る。娘。あ。も。ま。入。る。う。ね。我。子。の。雙。を。び。く。こ。も。す。れ。と。て。刀。を。ぬ。と。ひ。り。て。ま。ぐ。り。切。碎。き。中。が。て。ま。ら。先。わ。つ。な。ぬ。と。て。む。さ。く。と。敵。を。こ。て。皆。一。同。お。忍。れ。め。り。村。を。弓。を。射。その。刀。を。取。り。て。打。入。り。て。秘。つ。れ。云。中。つ。これ。正。しく。父。の。首。を。て。其。陰。を。失。り。け。り。い。か。し。て。愛。小。房。り。あ。て。瀧。お。敵。の。腕。を。も。つ。つ。め。さ。り。ん。世。を。報。ひ。とい。あ。お。と。実。は。有。多。く。と。い。ひ。と。は。猿。ぐ。れ。は。横。紙。を。破。る。大刀自れ。も。さ。る。ふ。り。う。と。と。熊。改。居。の。肉。を。食。う。る。故。や。これ。より。後。う。ろ。ま。荒。く。後。顔。を。ま。ふ。人。お。そ。ろ。ま。ま。に。成。る。れ。は。



ちやハ伏屋  
 のそと酒が  
 茶種を  
 人の志  
 ららふ所

玉力自

月切音表二四

七九



置物言表二四

七九



馬場の末

新編 巻之四

三十



こゝろ 善太  
 五七  
 三三  
 服を  
 掛  
 てる  
 ところ

寂菜の善太

新編 巻之四

黒刀自とだふいとせして又鬼婆とぞめど名うたれか。山蔵の人のゆく  
と清。いふ事久えん。残りんつまふゆる色しと。

月宵鄙物語 卷四 畢

つこのよひまりのくうまのまきりくう  
月宵鄙物語 未之巻 目錄

第五卷

大儀の虎尼とかりて善光寺に清れる。小仙が瀧の山末  
鬼婆浅間山の火焚かそらるる。二者とも善光寺に  
詣のり。別作か亡母小孝養を尋とす。

第六卷

拍寄の家士虎を即鹿宿の古寺に女難儀を救ふ。  
卯吉白蛇小孝行のり。沓掛の宿にて久六鬼王法師小  
戒らるる。虎を即鹿太成欺とす。

第七卷

小仙草はあて癩人の為し秘しめられんとして難儀を遁るる。  
夕霜前のはら小仙草をたると。鹿を即鹿小仙小上り達る。  
松山鏡の事。鬼婆牛小知れて台をさす。清とす。

第八卷

長者の万燈貧女の燈のり。弓を即鹿太を討る。大儀の  
禪修尼善光寺に因果抄語のり。姥捨山桂の事。  
伏屋布施玉の由来。猫の祠前社の録記。

作者 四方歌垣



重工 柎々居辰齋



備書

石原駒知道

剞劂

田代吉五郎

○四方歌垣主人著述讀本目錄

母樹杜 月宵鄙物語 本末八卷出末 文溪堂版

燒捨山 花晨都物語 全部五卷近刻 同版

壬生躍 畠繪抄

